

## 研究資料

### 画伝幼学 絵具彩色独稽古（天保五年）

染谷香理

最初にこの『絵具彩色独稽古』を読んだ印象は、実にバランスが悪く不自然な技法書だということだった。本文の記されている二十三丁のうち、最初の四丁で絵具の使用法を説き、残りの実に十九丁を使って四十七種類もの素材やその種類にわけ、礬水とうすゐの割合を記しているのである。同じ「独稽古」と題し年代の近いものに、宮本君山の『漢画独稽古』（一八〇七年）があるが、こちらは画論や筆法、絵手本、画材やその使い方について、およそ絵を描くために必要であるとおぼしき知識を網羅している。これならこの本を初学の者が手に取って「独稽古」ができそうである。ところが、『絵具彩色独稽古』のほうは、これを一冊手に取っただけでは、なにを稽古したらよいか迷いそうである。素材や紙の厚みなどによって礬水の製法を変え、それは、絵を描く者にとって一般的なことである。しかしながら、これほどまでに細かく、膠や明礬の割合を使い分けるようなことはあまりないのである。むしろ初学のものにとっては、混乱を招きかねない。それなのにもかかわらず、この頃の技法書に必ずといっていいほど記されている、絵を描くための心構えや、筆法、絵手本や画譜といったたいがい全くないのである。礬水が絵を描く前の準備段階であるはずなのに、礬水へのこだわりと、絵を描くことへのこだわりのバランスが非常に悪いのである。またこの他にも、不自然な箇所がある。それは、絵具の使用法を記した最後（七丁）に、「此外いろ／＼の繪具彩色方多ければ即席そくせきの事をしるし其餘そのよの秘傳ひでんハ第二編だいにへんにくわしく記す」とあるものの、それにあたる第二編が出てこないものである。執筆予定だったものの何らかの形で出版できなくなったとも考えられるが、この文献の調査を進めるうちに、稿者の感じたこれらの違和感の原因が明らかになってきた。

『絵具彩色独稽古』は稿者が科学研究費補助金を得て、多量の日本画に関する技法書を収集し分析する中、東京藝術大学大学図書館所蔵の文献を調べていく過程で見いだした。東京藝術大学本の書誌情報は次の通りである。

『画伝幼学絵具彩色独稽古 全』 板本 袋綴二十六丁 水色紙表紙 布目型押 中本（縦十八・八 横十二・七センチ） 東京藝術大学大学図書館蔵（元東京藝術大学教授脇本十九郎氏旧蔵図書）

題 籤 「画伝／幼学」 絵具彩色独稽古 全」

見返し 「榎斎先生著／「画伝／幼学」 絵具分量考／東都 文刻堂蔵版」

内 題 「画伝／幼学」 絵具彩色独稽古（彩色独稽古は入木）

引札広告Ⅱ出版案内 江戸繁昌記「静軒先生著」初編／江戸繁昌記「同上」式篇／江戸繁昌記「同上」参編「近日出版」

奥 書 日比野氏

備 考 見返し、序文、凡例は藍刷。丁付は、口ノ一（序文）・ナシ（凡例）・口ノ二／口ノ五・六・三／二十・ナシ（広告）。東京藝術大学図書館の書誌情報には二十丁と掲載されているが、それはこの丁付の混乱によるもので、実際は二十六丁である。十九ウに礬水を引く童子の挿画あり、落款は桃二画。

著者の榎斎と凡例に名前がある鹿田孝清については、榎斎が江戸の絵師で、鹿田孝清が京都の人であること以外は、共に不詳。鹿田孝清は日本古典籍総合目録データベースで検索すると、他に『彩色童諭』という著書がある。『彩色童諭』の書誌情報は次の通り。

『彩色童諭』 写本 袋綴二十丁 深緑紙表紙 半紙本（縦二十四・〇 横十五・九センチ） 国立国会図書館蔵

題 籤 欠（左肩に剝落痕）

内 題 彩色童諭

蔵書印 「帝国図書館蔵」朱文方印・「大正三・一一・五購求」朱文丸印

備考 挿画なし。

本文に数カ所藝大本の『絵具彩色独稽古』と記述に些少の違いがあるが、ほぼ同一。なぜ内題が『彩色童諭』となったのかはわからないが、『絵具彩色独稽古』の写しと思われる。

藝大本の題簽には「画伝／幼学」絵具彩色独稽古とあり、見返しには「画伝／幼学」絵具分量考とあるので、「絵具彩色独稽古」と「絵具分量考」で日本古典籍総合目録データベースを検索すると、国立国会図書館、東北大学図書館、日比谷図書館（日比谷図書館の加賀文庫は現在東京都立中央図書館の所蔵）、西尾市岩瀬文庫、九州大学図書館、紙の博物館、富山市立中央図書館にそれぞれ所蔵されていることがわかる。このうち、国立国会図書館所蔵のものは、昭和二十年代から所在が不明ということだった。また、西尾市岩瀬文庫は書誌情報が書誌データベースでホームページに詳細に公開されていたため、それを引用した。その他所在の確認できたものを掲載順に列挙する。

#### 東北大学本

『絵具分量考 完』 板本 袋綴二十六丁 水色紙表紙 布目型押 中本（縦十八・七横十二・八センチ） 東北大学図書館所蔵（狩野亨吉氏旧蔵図書）  
 題 簽 欠（『絵具分量考 完』の墨書あり）  
 見返し 「榎斎先生著／『画伝／幼学』絵具分量考／東都 文刻堂蔵版」  
 内 題 「画伝／幼学」絵具彩色独稽古（『彩色独稽古』は入木）  
 引札広告Ⅱ出版案内 江戸繁昌記「静軒先生著」初編／江戸繁昌記「同上」式篇／江戸繁昌記「同上」参編「近日出版」

備考 見返し、序文、凡例は藍刷。十九ウに礬水を引く童子の挿画あり、落款は桃二画。最終丁ウに「愛知県尾張国名古屋」等書き込みあり。狩野亨吉氏によるものか。

#### 東京都立中央図書館本

『絵具分量考』 板本 袋綴二十六丁 水色紙表紙 布目型押 中本（縦十八・六横十二・五センチ） 東京都立中央図書館蔵（加賀豊三郎氏旧蔵図書）  
 題 簽 「絵具分量考」  
 見返し 「榎斎先生著／『画伝／幼学』絵具分量考／東都 文刻堂蔵版」  
 内 題 「画伝／幼学」絵具彩色独稽古（『彩色独稽古』は入木）  
 引札広告Ⅱ出版案内 江戸繁昌記「静軒先生著」初編／江戸繁昌記「同上」式篇／江戸繁昌記「同上」参編「近日出版」  
 備考 題簽の「絵具分量考」は後補。題簽の周囲に剥落痕あり。見返し、序文、凡例は藍刷。十九ウに礬水を引く童子の挿画あり、落款は桃二画。

#### 西尾市岩瀬文庫本

『絵具分量考』 板本 袋綴二十六丁 水色紙表紙 布目型押 中本（縦十八・九横十二・八センチ） 西尾市岩瀬文庫蔵  
 題 簽 欠（剥落痕あり）  
 見返し 「榎斎先生著／『画伝／幼学』絵具分量考／東都 文刻堂蔵版」  
 内 題 「画伝／幼学」絵具彩色独稽古（『彩色独稽古』は入木）  
 引札広告Ⅱ出版案内 江戸繁昌記「静軒先生著」初編／江戸繁昌記「同上」式篇／江戸繁昌記「同上」参編「近日出版」  
 備考 見返し、序文、凡例は藍刷。十四ウに礬水を引く童子の挿画あり、落款は桃二画。最終丁左側の空欄に銅版精刻（青刷）の印紙紙片を貼付（四隅に「不」「許」「翻」「刻」、右左に「版權免許」「検定既済」、版面寸法二・九／三・〇）、同丁裏は空白。  
 ※右は西尾市岩瀬文庫による公開情報だが、挿画は十四ウではなく、十九ウか。

#### 九州大学本

『画伝幼学絵具彩色独稽古 全』 板本 袋綴二十六丁 水色紙表紙 布目型押 中本（縦十八・八横十二・七センチ） 九州大学図書館蔵（相見香雨氏旧蔵図書）  
 題 簽 「『画伝／幼学』絵具彩色独稽古 全」

見返し 「桓齋先生著」 「画伝／幼学」 絵具分量考／東都 文刻堂蔵版」

内題 「画伝／幼学」 絵具彩色独稽古（彩色独稽古）は入木

引札広告Ⅱ 出版案内 江戸繁昌記「静軒先生著」初編／江戸繁昌記「同上」 式篇／

江戸繁昌記「同上」 参編「近日出版」

備考 見返し、序文、凡例は藍刷。十九ウに礬水を引く童子の挿画あり、落款は桃二画。

紙の博物館本

『画伝／幼学』 絵具彩色独稽古 全 板本 袋綴二十五丁 水色紙表紙 布目型

押 中本（縦十八・八 横十二・六センチ） 紙の図書館蔵

題 籤 「画伝／幼学」 絵具彩色独稽古 全

見返し 「桓齋先生著」 「画伝／幼学」 絵具分量考／東都 文刻堂蔵版」

内題 「画伝／幼学」 絵具彩色独稽古（彩色独稽古）は入木

引札広告Ⅱ 出版案内 江戸繁昌記「静軒先生著」初編／江戸繁昌記「同上」 式篇／

江戸繁昌記「同上」 参編「近日出版」

備考 見返し、序文、凡例は藍刷。紙の図書館本は広告のある丁が裏表紙に貼付されている。十九ウに礬水を引く童子の挿画あり、落款は桃二画。

富山市立図書館本

『画伝幼学絵具彩色独稽古 全』 板本 袋綴二十六丁 水色紙表紙 布目型押 中

本（縦十八・七 横十二・七センチ） 富山市立図書館（山田孝雄氏旧蔵図書）

題 籤 「画伝／幼学」 絵具彩色独稽古 全

見返し 「桓齋先生著」 「画伝／幼学」 絵具分量考／東都 文刻堂蔵版」

内題 「画伝／幼学」 絵具彩色独稽古（彩色独稽古）は入木

引札広告Ⅱ 出版案内 江戸繁昌記「静軒先生著」初編／江戸繁昌記「同上」 式

篇／江戸繁昌記「同上」 参編「近日出版」

備考 見返し、序文、凡例は藍刷。十九ウに礬水を引く童子の挿画あり、落款は桃二画。最終丁ウに書き込みあり。山田孝雄氏によるものか。

調査した結果、題籤に「絵具彩色独稽古」と「絵具分量考」の違いがあったが、「絵具分量考」とあるものはいずれも題籤欠による後補であったため、「絵具彩色独稽古」が原題であろう。見返しにある版元の文刻堂は、江戸通本町三丁目にあった西村源六の地本屋か（井上隆明著「改訂増補 近世書林板元総覧」青雲堂書店、上里春生「江戸書籍商史」名著刊行会）。桓齋による序文に天保五年とあり、広告の「江戸繁昌記 式篇」と近日出版となっている「江戸繁昌記 参篇」がともに天保五年出版なので、矛盾はない。『江戸繁昌記』は「克己塾蔵板」で著者の寺門静軒の私塾が版元であるが、文刻堂との関連性は不明。丁付は、他館所蔵のすべての冊子においても藝大本と同一の混乱がみられた。内題の「画伝／幼学」 絵具彩色独稽古」のうち、「彩色独稽古」が入木であること、丁付の混乱、本来有るべき刊記がない、七ウより前と八オより後で本文の文字の太さが異なる印象をうけることなどから、何らかの改変が加わって出版されたもので間違いないだろう。序文のロノ一（二丁）と本文前半のロノ二（ロノ五・六（三丁七丁））が桓齋著『絵具分量考』の一部、凡例（二丁）と後半の三（二十（八丁二十五丁））までが鹿田孝清著であると考えられる。また前半部分の桓齋著と思われる部分の最後である六（七丁）は最初にあげた「此外いろいろの繪具彩色方多ければ即席の事をし其餘の秘傳ハ第二編にくわしく記す」ではじまり、その後すぐに、礬水の話になっていることから、作爲的に次の礬水の割合を記した鹿田孝清著の後半部分につながるよう、入れられたのだろう。また、本文開始のロノ二（三丁）が「○彩色繪具つかひやうの秘傳こゝに記す」ではじまり、丁付が「ロノ一」ではじまるのは不自然であることから、後ろにある六（七丁）のほうが第一編の一部で、ロノ二からロノ五（三丁六丁）までが先ほど指摘したところの第二編にあたるのかもしれない。鹿田孝清と桓齋があたかも共著となるように桓齋著の『絵具分量考』の内題に入木をして出版されたのが、『絵具彩色独稽古』なのだろう。桓齋著の前半と鹿田孝清著の後半が、それぞれ独立した形で出版されたことがあったのかは現時点ではわからない。この『画伝／幼学』 絵具彩色独稽古』の前半のみ、後半のみの冊子をご存じの方がおられれば、お教えいただきたい。

〔付記〕

本研究は、平成二十六年年度 科学研究費補助金 基盤C「経験と感性の継承―技法書データベースの構築」(研究代表者 柴谷香理)の一環として行ったものである。なお、翻字は日本学術振興会特別研究員(東京大学史料編纂所PD)の綱川歩美氏にお願いした。

〔凡例〕

- ・改行位置を「/」で記した。
- ・虫損等により判読できなかった箇所は「■」で記した。
- ・丁番号と丁付は、「(丁番号「丁付」)の順で付した。

画傳幼学繪具彩色獨稽古 全

桓齋先生著／畫傳幼学繪具分量考／東都 文刻堂蔵版

それ書畫は一體の要なりといへども、／文盲畫を見て事蹟を知るは／書もまた及ばざる事遠し、すでに會津の盲曆、畫なくハ何を寫／さむや、それは童蒙の遊び、／画に如ものなかるべし、故に師

「(一オ)

なくして、彩色の一助ともなれ／かしと、繪具の製作を普く／輯め、小冊となす事しかり

于時天保五甲午春／垣齋老人誌

凡例

それ夫畫に礬水を用ること、普く和漢ともに古く用ひ来りし／なり、雖然 未其 礎かなる發もきかず、亦分量の定りもなか／りしに何れの時よりか、膠十匁、明礬五匁を以て煮、是を／十五の割と名て、此分量にて事足れり、然りとはいへども、

「(一ウ)

／ 惟ふに、數年画の爲にためし見るに、紙の品々、絹の地合により、また金銀地杉戸の類、大いに相違すること／あり、或ハ古画を模すに必ず二遍を用ゆ、又水墨着色／俱にどうさの分量に依て光澤あり、年中寒暑風

「(二オ)

雨に差別あり、是分量を辨へざる時ハ、かならず損望／ことあり、此書は諸人の需に應じて初心幼学の助／に、小冊に編諸君子改め是を正して、試に用ひ給ハ、是れ予が幸なり

平安 鹿田孝清【花押】

「(二ウ)

画傳幼学繪具彩色獨稽古

東都繪師 桓齋先生著

○彩色繪具つかひやうの秘傳こ、に記す

○胡粉ハまつかくすりによく摺てぬるま湯を少し入こねて能々／とろりとすうす膠を湯にひたし薄くととき少しつ、入て筆の／あたり和らかになる程に水と膠を等分に加へ遠火にて温め

「(三オ)「ロノ二七

用ゆなり何れも胡粉の加へ方と似たるものなり。

○唐の土ハ水に膠少々水にして交つかふべし／此ハ胡粉に類

○朱ハ少しかくすりにして薄膠を少し交てとろりとときて／少々火にあた、め用べし但し丹にてうへゑもやうをか／○丹ハ水干して用ゆべし／但水干なしに用るときハうす膠をませて筆のさきへ／付て

「(三ウ)「ロノ二七

○セウエンジハあつき湯へしほり出して美濃紙にてこし滓を取／遠火にてあた、めよく／つめて用ゆべし○作り黄土ハ丹と／雌黄を目分量に入薄くして胡粉を少しいれつかふべし／○土黄土ハよくつぶし膠と水と等分に交てつかふ也○香／色ハ弁柄と雌黄等分に交てつかふ也。○タイシヤハ弁柄へ硯／墨入目分量にして遣ふべし○薄草ハ 雌黄、藍蠟、ませ

○奈良緑青ハ水少し入火にてあた、めよく練て水をくわへ／とろりと解て膠少々  
ツ、交油を少し加へ遣ふべし○白六ハよく摺水膠少々  
胡粉を少し加摺入用ゆ／○また丹の上水にても用ることあり○浅黄ハ胡粉に藍蠟  
を／加へ用ゆる○紫ハエンジをかく摺にて藍蠟を加へ膠を／少々加へ用へし○紺  
ハ藍蠟へ胡粉を少々入膠を交つかふべし

「(四オ)「ロノ三」」

○柿色ハ弁柄へ膠を交遣ふべし○エンジノグ○白六○黄土グ／○セウエンジノグ  
○肉色いづれも胡粉を加減して用る也○花紺／青ハ水ひた／に入れ後にうす膠  
とろりとして少し入火にあた、め／用ゆべし／但にかハ上へ／○岩緑青の製法紺青と  
同前也これハ／油を少々加へれバ上へ模様を書く秘伝也○墨ハかるといふ墨  
をよくすり膠と水を入用ゆ 但上へ硯墨にてもやうを／○金の遣ひ

「(四ウ)「ロノ三」」

やう箔をとき水を加へ膠を入べし○銀も同前なり○下の／金銀ハ青の  
何れも水膠にてつかふべし。

「(五オ)「ロノ四」」

○水繪具の製法／これハ下の字の墨書のきえぬ  
○赤ハセウ／○紅ハ朱ハ上水にてもよく／藍ハ紙のあい／をもちゆ○草ハ  
等分にまぜてつかふべし○黄ハ雌黄をすりて／○紫ハあい紙と紅  
どに用ハ

「(五ウ)「ロノ四」」

○赤ハせんじ／○黄ハスミをせんじ○金のかハリハ／にて遣ふ也先へ蠟にてもやうをかき／上に  
繪具をねれバよく／○其外ハ丹・弁柄・朱・いづれも／上水をつかふ也○緑青右のごと  
くすり水を入れ膠を少々入藍を水にてしぼり出しませ上水をつかふ 此ハ／草  
○達磨その外人形の彩色繪具  
○赤ハ下へ胡粉を水と膠と等分に入れてねるべしその上へ長吉／丹

「(六オ)「ロノ五」」

○小人形ハ丹へ膠をつよくして上に朱をこれにかハを／／ねり又其うへに三千  
本膠をとろりとして引／出すため也○緑青ハ／いれる也○墨胡粉同○紺ハあいろうに

膠をませ用ゆる／なりその外ハ右に記す処と用ひ方同断なり○墨ハ／膠をとかし  
硯墨をませ茶碗にて火にかけ煮詰て／つかふなり是を煮ぐるミといふ漆のごとく  
つや出るなり

「(六ウ)「ロノ五」」

此外いろ／＼の繪具彩色方多けれバ即席の事をしるし／其餘の秘傳ハ第二編にく  
わしく記す。

○礬水を煮製法り／よくこ、ろえべし  
先膠を水にひやし能く洗事を第一とす／仮令ハ赤鍋に水を入湯すこし温し所へ膠  
を／入能々煮るなり。件の膠もよくとけ湯の弗る

「(七オ)「六」」

所明礬を細末にして入能くかき廻し／たとへハ煙草二三ぶくも呑程の内明ばん／  
煮ものなり夫より能きまして引用ゆへし  
但湯の余りにある所へ膠を入る時ハかならず／にかわなべの底に焼付て分量よろし／からず故によ  
くこ、ろへてにるべし／○又夏ハいかにもさましてのち引べし／冬ハすこしゆるミしを用ゆべし是要  
なり

「(七ウ)「六」」

○膠に二品あり晒にかわ  
△明礬二品あり 生明ばん  
△二品紙の品々により、晒を用ゆ、又珍と当分／もあり、また焼明礬と生明ばん  
を、四分六分に／加ふるもあり或ハ四季の分量昼夜晴雨の／差別ありくわしきハ  
下に巨細にしるす。

「(八オ)「三」」

○晒膠 廣巾にかわといふ／○玲膠 千本にかわ  
△生明礬 つけねの明ば 又極さらしともいふ  
△焼明礬 火にかけ焼た  
焼ミうばんハ生ミうばんよりハ、あくなきゆへに功のふ薄し／まつ此、二しなにて  
こと足るゆへにはあらましをしるす

「(八ウ)「三」」

但し唐の阿膠ハ分量知れかたき故に唐の品／ハ用ゆることなれ都て礬水にハ我くにの廣さらしを上  
品とす○我国明礬の始めハ四十二代文武天皇二年戊戌六月を江／国より初てこれを奉る。文政十三寅ま  
で／一千百三十  
三年になる也

○分量水一升の割印膠／△未皆見合知るべし

金地屏風襖の類 通例也さらし〇壹匁／燒△五分

金地同 二編押／三編押分量同し

金地同 〇壹匁二分／燒△五分

金地桐板の上に押 箱押にてたる也さらし〇八分／やき△四分

金地堅木の上に押 さらし〇九分

金地屏風襖の類さび押へ 油ぬき／ともいふ

但鳥の子かミ其外薄葉等に金箔を押す上に引時

ハどふさの分量さび押へと同じ〇八分△四分也

○無地金に替水を引こと俗に錆押へといふ是ハ／屏風に画もなく用ゆるに押箔の俣

なれば／箔の合め或ハ繕ひの所々箔おちつかぬ／故に薄く替水を引ことを錆押へ

とハいふなり。

○按に我 朝の昔屏風の發り四十代 天武／三十五代 舒明帝第三皇子／くわうてい 皇帝の御宇朱

鳥／元丙 戊 中宗嗣聖三二当ル 年の春新羅国より／始てこれを賣是屏風の始めなる

也 禮記に天子斧／展くん 件の屏風に画様ありし説種々有と／雖も慥かなる説もなく忘説

なり既にして

光明皇后 第四十五代聖武帝／てんひやうしやうほうねん 天平勝寶年中に／法華滅罪寺都の御所より東大寺

大／御参詣の時、其間十八町余左右往來の路次を鴨／の毛の屏風を以て是を塞く

とかや 是大唐より渡りし／屏風今に東大寺の什寶世に知所也。按に是必／天武帝の御時渡りし屏風な

宗旨 らんか○法華滅罪寺ハ尼の国分寺ニして淡海公の旧宅光明皇后の御建立南都十五大寺の内御

律宗

左尼御 其後に至りて金屏風あれとも繪／もなく無地金と見へたり。何れの時代よ

り／繪をかき用へしことにやその世に無地金の屏／風を賤しむると雖も昔ハ貴人の

の家ニも稀なる／こと也 公事根元二日正月一日四方拜に清涼殿の／東階のまへ御の外ニ御今世の

俗人無地金を鹿 屏風を立めくらし其／中に御座を設け給ふ御事あり傳是二略す

俗人無地金を鹿

〔十一才〕〔六〕

略にして彩色雲箔砂子泥引等を上品と／とす是其故実をしらざるか故なり。

銀屏風吉凶共晴に用る作法あり 婚札にハ／惣銀にして／胡粉を以て鶴亀松竹梅等を画くなり。

鶴亀松竹の傳あれとも梅の傳／

曾てなき事なり。餘ハ是に略す。

金銀屏風支那の傳ハ是二略ス

切錆押ハ繕へ■またらになりて箔うきて見苦を止る／計に引事也。金銀地に替水

をするハ繪の為なり。先／金箔を押に下地に雌黄を塗り其上に粘をして押也。／

粘といふハにかわとふのりを 又箔を轉にむきくるのを／麻の切に地之箔の合紙をなそり

／合てぬり附るをいふなり

夫より箔を轉すなり

それゆへ油の気水に依て墨をはしく為にどふさ／引用るなり。

金銀地に水墨を画に習ひ口傳あり画法ハ／こに略す○又金銀の襖等ハ俄に画かく時ハ／どふさを引て

ハわつらハしきゆへに、かわらけを細末にして襖にふりかけ羽はうきにてよく／やわらかに掃ならず

也。○それ日光ろ石にても同じ只油氣をとりとふさの代になる

ゆへ也。○また金銀地紙の類に右二品の細末にて／ことたるなり。

○婚式の屏風に箔の合め左右皆口傳

あり／是ハ本朝画名家一覽の卷にするす

銀地屏風襖の類 箔の押よふハ金と同じ／但し下地なし白

銀地 絹張の上、又ハ布の類に二編二へん／箔に

銀地桐板之類 さらし〇武及／生 △壹匁

銀地堅木之類 さらし〇武及／生 △壹匁

銀地さびをさへ さらし〇壹匁

絹地 水上二同し さらし〇武

但加賀絹のい地合うすき品にハ〇式及△壹匁にて／よろし、また画柄によりて〇さらし 玲と当分に

くわて／用ることあり能心得べし。／絹地へどふさの引よふ、先はけにたくさんふくまぬ／よふ

にして角の方より縁二三分を除きはけ目の／出来ぬよふに引べしと角絹ハ引のこりはけめ／てき

勝なり引仕舞の後枠の横木をそれぞれより枠のふちをト／んと打べし、其外絹のはり様絹に

／明ばんの光りのなき法／習ひ口傳あり。

〔十三ウ〕〔八〕

唐木綿、芭蕉布、葛布の類近年ノカ／すき〇八匁五分／生△五匁  
但近世種々の風流妙て棚戸袋の類を竹の皮などにて張其品によりて二へんとふさがる／按て袋に袋戸の名を棚の戸の名を相違あり俗に床わきの袋戸といふは是たるの戸なり袋戸といは、どうふさのふすまのこと也これこゝろいべきこと也

〔十四オ〕〔九〕

唐紙とうしうら／すき〇十匁六分  
唐紙とうしうち／生やき△五匁五分  
ふくさ〇唐紙とうしもいふ俗語也 やき△六匁五分

〇唐紙ハ大唐紙といふ南京より渡る又藤紙とも書て本名亀邊紙といふ〇紙の五二尺二寸ノより三寸迄ハ俗通 中品ハ隆茂森達丸ノ昇下品ハ廣大その外九寸、上達、帳、伯、義上、議光等の品あり、寸法立一尺九寸より二尺迄、横四尺五寸也、尤かねざし其外上二同し

〔十四ウ〕〔九〕

〇屏風ニふすまを張に。うら打唐紙どふさの、しめノりにて張ことを禁すかならず禁水きかす／とふさ能々かわかして後ハ張べし／〇裏打唐紙とふさなしに張ことなり跡にてどふさ引時ハ画のためにハ大にわろし

白紙はくしうら／さらし〇九匁ノ焼  
うち 生合△五匁五分

都て裏打のものハ裏より引へし跡にて面をなぞるへし禁水へ元繪の違を霞暈の分る為に引ものニ

〔十五オ〕〔十〕

或ハ彩丹繪の俱をたもつを専らとし。又墨龍等にハどふさ裏打紙にて能く染ミこみしよふに引かされハ暈重るに徒て損あり画の要用なす也。

〇白紙ハ唐土にて扇料に用よし書名いまたノ詳ならず又印ありも同興同昇ハ立二尺ノ横三尺五寸数一本といふハ八千枚一ケ三十本ノ二千四百枚なり。

更紗唐紙 画を書く紙ニあら さらし〇九匁五分  
すノ下られに同じ さらし△五匁五分

〔十五ウ〕〔十〕

緑青唐紙 さらし〇ノ  
焼△ノ

綸子唐紙 さらし〇ノ  
焼△ノ

紅彩唐紙 さらし〇ノ  
焼△ノ

近來京大坂にて、しげ唐紙を製す渡るものノハあらず、又とふさ引こと有り〇七匁五分△三匁也

竹紙 さらし〇七匁ノ  
うち 焼△三匁五分  
竹紙立八寸一分 横二尺五寸五分一分帖  
ハノ八十枚一固を四十八帖入也とぞ

〔十六オ〕〔十一〕

画牋紙 さらし〇八匁四分  
打 生△五匁四分

詩箋 俗に書簡紙詩の贈答に さらし〇八匁四分  
ノ用ゆ近來和製もあり 焼△四匁二分

仙連紙 又千連紙とも、さらし〇ノ  
古画を模もよし 焼△ノ

馬糞紙 書名不詳近世種々の名目  
あれとも取用に足らす

和藤紙 さらし〇九匁五分  
和藤紙打 生△四匁七分  
日本所之にてすき出すどふさ一編にてハ墨をはじくノかならず二編引べし二度めの分量ハ水一升に  
〇壹匁ノ△六分の割合に用ゆ。墨色繪の俱の光沢ありてノ画もよくしか下品なり泥引等ニハあらて

〔十六ウ〕〔十一〕

生間似合 一名屏風間似合とい 玲〇十二匁五分  
ふノ越前の産なり 分ノ生△八匁  
引様能々しミ込しかふにひくべし、  
此紙ハはけめのノむら出来がちなり

〔十七オ〕〔十二〕

昔唐紙用ざる時ハ皆間似合なり〇屏風一雙にノ六十枚を以て張〇近年とても間似合を以て本ノ式ノ屏風はることあり〇立一尺二寸五分横ノ二尺二寸二分なり〇巻もの繪必是を用ゆべし  
大間似合 子ノ類ノ玲〇十二匁五分  
皆鳥の 生△八匁五分  
此紙にて傳書系圖等を書ことあり分量同しノ

鳥の子 色鳥の印に似たるノすき〇十二匁五分  
とりの子といふ 生△八匁五分  
古画をうつすに さらし〇九匁五分  
よろしきかミ也 さらし△五匁五分

雁皮紙 さらし〇九匁五分  
よろしきかミ也 さらし△五匁五分

〔十七ウ〕〔十二〕

土間似合 すき〇十三匁五分  
生△八匁五分

土間合ハ撰州名塩村の産也。土間似合ハ天子ノといふ泥土を和そて造るゆへ名とす是等のノ類数品ありとふさ甚々引にくき紙なりノ〇此紙半間の尺に合ゆへ間似合と云々

色間似合 分ノやき△五匁  
さらす〇八匁二分  
何れにても右の類ハ此分量にて用へしどふさノ引よふの為より画かきにくきこと俣あり  
板下或ハうら さらし〇七匁ノ  
打ノ等に用ゆ やき△三匁五分

〔十八オ〕〔十三〕



○唐銅 赤銅 瀝 麻の切又ハすい  
 ○鐵鍋を禁す油け塩氣魚油の類悉く禁す也／又金銀地等引時はけに糊氣あれば箔皆摺脱／け又画のために悪し刷毛ハ能く洗す、き用こと要／用なり。

○小器にて煮の法  
 ちいさいうつわ

「二十三オ」「十八」

図 赤鍋五合入

飯令ハ一升のどふさ入用の時ハ件の五合入に七八分／目水を入初めのごとく膠をよく洗ひこれをにる夫よりかの△を入れて煮終ておろし跡より水を入／煮つまりて四合もあらば水を六合入へしました

「二十三ウ」「十八」

三合五夕につまりしならば、六合五夕の水を入／都合壹升に見積よく、かきまわし涼て引／用ゆへし。右のごとくにすれば、五合入の鍋にて三／升も四升も手輕に出来ること也。一升入又ハ一升五合／入の器なれば七八升／の用に足なりミな夫れに準て水一升の本法の分量を能々こ、ろひしこと要用なり

二編磬水 さらし〇八匁  
 ／やき〇四匁

「二十四オ」「十九」

右〇△二品前のことくにて一編引て乾しました／二度引なり。二度めのふんりやうハさらし〇三匁／やき〇二匁の分量也。／引残りのなきよふにすべし 唐宋元明の画或ハ／本朝雪舟宗丹祐清元信永徳以来の画を模／に心す、二編とふさならてハ其筆法をへること、あ／たわす、又張附壁等の座敷天井等ハ大画を／なすにハ必二編とふさにて画くへし。

「二十四ウ」「十九」

但絹に二へんどうさを用る俗人あれとも／是ハ用るに足らず用ゆへからす 裏磬水 さらし〇四匁  
 ／焼△一匁

往古裏どふさなすと也近年表具をなすもの、／専ら用る所なり。其ゆへハ俗にいふ極さいしきの花鳥或ハ芙蓉牡丹又ハ密画絹に肌うら／を打に繪具の散を悉て裏よりとふさを引なり。／繪の具花の■等の散る思なし。余り△つよくハ画の表にひかりを出すあしきこと也依て分量を／以て引べし 本朝の繪法にて画書終て名印をす、表具

「二十五オ」「二十七」

の為にゑのくを散すこと似あり、跡より繪具を補ハざる画法なり、夫ゆへ裏どふさを加ふるも可也表具の法式屏風衛立／間切等の傳、本朝名家一覽の末の卷にしるす。

【引札広告】出版案内

- 江戸繁昌記 静軒先生著 初篇
- 江戸繁昌記 全上 貳篇
- 江戸繁昌記 全上 参篇 近日出版

【奥書】日比野氏

「二十六ウ」

「二十六オ」

(表紙)

(二才)

(見返し)

(二才)

(二ウ)

(三才)

(二ウ)

(三ウ)

(四ウ)

(四才)

(五才)

(五ウ)

(六オ)

(六ウ)

(七オ)

(七ウ)

(八ウ)

(八才)

(九才)

(十才)

(九ウ)

(十一才)

(十ウ)

(十一ウ)

(十二ウ)

(十二オ)

(十三オ)

(十三ウ)

(十四オ)

(十四ウ)

(十五オ)

(十五ウ)

(十六ウ)

(十六オ)

(十七オ)

(十七ウ)

(十八才)

(十八ウ)

(十九才)

(十九ウ)

(二十ウ)

(二十オ)

(二十一オ)

(二十一ウ)

(二十二オ)

(二十二ウ)

(二十三オ)

(二十三ウ)

(二十四ウ)

(二十四オ)

(二十五オ)

画伝幼学 絵具彩色独稽古(天保五年)

(二十六才)

(二十五ウ)

(裏表紙裏)

五七

(二十六ウ)